都市のトリプレックス

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授 伊藤（いとう） 毅（たけし）

星の王子さま

『夜間飛行』や『人間の土地』などの作品を残したアントワーヌ・ド・サンテグジュペリ（Antoine de Saint-Exuépry）の代表作は、何といっても『星の王子さま』である。この作品は最初、1943年アメリカで刊行された。その後さまざまな言語で翻訳され世界中で読まれることになった超ロングセラーである。わが国では岩波書店がながらくこの翻訳権を独占していたが、2005年に翻訳権が切れたのをきっかけに各社から新訳が相次いで出されたので、大きな書店には『星の王子さま』コーナーが設けられるほどであった。

サンテグジュペリは作家であると同時に有名な飛行士だった。彼の作品はパイロットとしての経験をベースにしたものが多い。『星の王子さま』に登場する「ぼく」も飛行士であって、著者自身遭遇したリビア砂漠飛行機墜落事故の実体験がもとになっている（写真-1）。

ところで第一次世界大戦後、フランスではじめて民間の定期航空路が開設された時、その拠点になったのがここで取り上げるトゥールーズ（Toulouse）であって、サンテグジュペリはトゥールーズとカサブランカ（Casablanca）を結ぶ航路の飛行士として勤務していたのである。

写真-1 サンテグジュペリと星の王子の銅像（リヨン）

その後航空産業各社がトゥールーズに工場を構えるようになり、コンコルドの開発もトゥールーズで行われた。現在も、エアバスの本社がトゥールーズに置かれ組立工場が稼働中で、ヨーロッパにおける先端的航空産業の中核都市として不動の地位を占めている（写真-2）。このように航空産業都市トゥールーズは時間を遡るとサンテグジュペリと接点があり、世界的ベストセラー『星の王子さま』の誕生に一役買ったといえなくもない。

写真-2 エアバス

写真-3　ガロンヌ川とポン・ヌフ(橋)

写真-4　ミディ運河

交通と都市

現在ではトゥールーズといえば先端的な航空機産業がただちに想起されるが、もとをただすとこの町は一貫して交通とともに発展してきた歴史都市なのである。

トゥールーズの発生は古代ローマ時代に遡る。すでにその時点から交通・軍事・交易の拠点として繁栄していた。すなわち中央を流れるガロンヌ川（la Garonne)は、ピレネー山脈（Les Pyrénées)のアラン谷（Val d'Aran)を源としトゥールーズを経て、ボルドー(Bordeaux)でジロンド川（la Gironde）に合流する（写真-3)。つまり水上交通を利用してフランスからスペインに向かう場合、必ずトゥールーズを経由せざるをえなかったのである。さらに広い範囲に目を配ると、ガロンヌ川は地中海と大西洋というヨーロッパの2つの海を結ぶ大動脈の一部を形成しており、古くから交通の要衝として栄えた理由が納得できる。同じ地理的条件をもつ南西フランスのもうひとつの大都市ボルドーも古来、交易都市として成長を遂げた。

トゥールーズにはもうひとつ中世人が頻繁に利用したサンティアゴ・デ・コンポステーラ（Santiago de Compostela）の巡礼路が通っている。この巡礼路はフランス各地からピレネー山脈を経てスペイン北部に位置する聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラに通ずる。ここはイエス・キリスト12使徒のひとり聖ヤコブにちなんだ聖地で、ローマ、エルサレムと並んで3大聖地のひとつとして多くの巡礼者を集めた。フランス側からはこの巡礼路につながる道が4つあるが、このうち「トゥールーズの道」がここを通過する。サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路は1993年ユネスコ世界遺産に登録されている。

トゥールーズにはもうひとつ世界遺産に登録されているインフラとして、ミディ運河（Canal du Midi）がある。ミディ運河は1694年に完成した、ガロンヌ川から分岐する大量輸送ルートで、地中海と大西洋を結ぶ水上ルートを大幅に短縮するために開削された。しかもこのルートが完成するとスペインのジブラルタル海峡（Estrecho de Gibraltar）を経由する必要がなくなり、通行税を払わなくてすむので、ルイ14世（Louis XIV de France）の

写真-6 サン・セルナン聖堂内部

国家的プロジェクトに位置づけられ、当時最先端の土木技術を駆使して実施に移されたのである（写真-4）。ミディ運河ができたことによって、ワインの大量輸送が可能になり、ラングドック（Languedoc）地方のワイン生産は飛躍的に伸びたことが知られている。

このようにトゥールーズは古代から現在に至るまで、「交通」とともに成長した都市であり、現在の航空産業都市というあり方もそうした流れの延長上に位置づけられる。

宗教と都市

トゥールーズは交易・交通の要であると同時に、大司教座が置かれる宗教的拠点でもあり、さらには巡礼路の重要な経由点でもあったので、ここには数多くの宗教建築がたてられた。その最大のモニュメントがサン・セルナン聖堂（Basilique Saint-Sernin）である。

サン・セルナン聖堂は初期ロマネスク教会堂としてもっとも著名なもののひとつで、ヨーロッパのなかでも最大級の規模を誇る。1080年から1120年の間に建設された。十字交差部から屹立する鐘楼は町のあちこちから望むことのできる高さを有し、トゥールーズのランドマークになっている（写真-5）。巡礼者はこの聖堂を目印としてトゥールーズに立ち寄った。平面は外周部に二重側廊を設け、修道士の祈祷を妨げないで堂内を一巡できる、いわゆる「巡礼聖堂」形式を採用している。内部はロマネスク教会特有の重厚かつマッシブな空間が現出している（写真-6）。

サン・セルナン聖堂のもうひとつの顔として、キリスト教異端を弾圧するための拠点となったことが挙げられる。トゥールーズやボルドーが位置する南西フランスは、異端カタリ派（アルビジョア派ともいう）が分厚く広がる地域で、なかでもトゥールーズはカタリ派の中心となっていた。カタリとは「清浄」を意味する言葉で、キリスト教のなかでも極度に禁欲的な教えを信仰する一派であった。カタリ派は次第に当時のキリスト教の堕落を鋭く批判する民衆運動の性格を帯びるようになり、南フランスの有力諸侯の保護もあって一大勢力を形成しつつあった。カトリック教会はこの批判勢力を無視できず、異端宣告を下す。その弾圧には徹底したものがあり、アルビジョア十字軍を派遣したり、異端審問制度を導入して改宗をはかるが、なかなか効果が

写真-5 トゥールーズの町並みと
サン・セルナン聖堂

写真-7(上) ジャコバン教会内部
写真-8(下) ジャコバン修道院の中庭

上がらなかったようである(14世紀になってようやく根絶されることになる)。

ゴシック建築の名品、ジャコバン教会(l'église des Jacobins)もサン・セルナン聖堂と並んで見逃せない存在である。トゥールーズはドミニコ会発祥の地であって、ジャコバン教会の前身ジャコバン修道院はドミニコ会の修道院として1230年から1385年の間に建設された。「ジャコバン教会の椰子の木(palmier des Jacobins)」と愛称されている内部のリブ・ボールトは圧巻である(写真-7)。まるで椰子の木のように放射状に広がるリブ。このようなカラフルで斬新な内部意匠はなかなかお目にかかれない。ジャコバン教会に隣接する修道院の回廊もすばらしい。中庭には手入れの行き届いた幾何学庭園があり、それを取り巻く回廊は気品に満ちた静謐さを湛えている(写真-8)。

文化と都市

トゥールーズは「ville rose」、つまりピンク色の町と愛称されている。それはトゥールーズで使われている煉瓦がややピンクがかった色であることが直接的な理由だが、この呼称はトゥールーズがもつ多様で華やかな文化の比喩的な表現となっている。すでにみた建築文化はもとより絵画、彫刻、文学、エンターテインメント、スポーツなどなど、南フランスの文化的中核を形成してきた。

アセザ館(l'hôtel d'Assézat)は英語に直すと「the pink hotel」で、16世紀に建てられたピエール・ダセザ(Pierre d'Assézat)の邸館である。フランス古典主義建築の最初期の例であって、トゥールーズ煉瓦と石材を巧みに組み合わせた3層からなるウイングが中庭を取り囲むようにたっている。玄関にあしらわれた2本のねじり柱が、整然とした古典様式にアクセントを与えている(写真-9)。

1994年アルゼンチンの資産家ジョージ・ベンバーグ(Georges Bemberg)が永年にわたって収集した美術品をトゥールーズ市に寄付し、アセザ館は美術館に生まれかわった。現在はベンバーグ財団がその運営にあたっている。ここにはフランスを代表するトゥールーズ・ロートレック(Henri de Toulouse-Lautrec)やピエール・ボナール(Pierre Bonnard)などの絵画作品はもとより、彫刻、家具などが数多く展示され、近現代フランス美術の殿堂となっている。ムーランルージュの踊り子や酒場の女たちを生涯描き続けたトゥールー

写真-9 アセザ館

ズ・ロートレックは名前からもわかるように、南西フランスの統治者トゥールーズ伯爵家の出身であった。

都市のトリプレックス

トゥールーズの中心、キャピトール広場（Place du Capitole）にたつと、町中にたつさまざまな歴史的モニュメントが背後に控え、広場では毎日マーケットが開かれ、賑わいをみせている（写真-10）。この広場はきわめて広大で、広場の規模はトゥールーズという都市の大きさをよく示している。しかしトゥールーズはもちろん一挙に大都市になったわけではなかった。

都市が成立するための条件には交通、経済、政治、宗教などのいろいろな要素が想定できるが、トゥールーズはまずガロンヌ川沿いの交通の要衝に最初の都市基盤が築かれ、やがて宗教的な中心というもうひとつの属性を帯びるようになり、そして時間をかけて豊かな文化を育んだ。このように交通、宗教、文化はあたかもトゥールーズという都市を形質化する3重螺旋の遺伝子（DNA Triplex）のようである。

こうした遺伝子がある時代にはカタリ派という特異なグループを生む土壌を提供したであろうし、オック語（Langue d'Oc）という地域固有の言語を普及させた。そしてピンク色の華やかな町と文化を育て上げたのである。一定の歴史的時間を経て成長した都市はどの都市ひとつ同じではない。それは都市の外観だけでなく、都市の雰囲気や個性など可視化されない部分にも深く刻印されている。トゥールーズにはそうした「都市の遺伝子」がいまなお、脈々と生き続けているようにみえる。

写真-10 キャピトール広場のマーケット